

平成二十九年九州大学学位授与式にあたり、博士課程修了生のひとりとして、ここにお礼とご挨拶を申し上げます。本日は総長の久保先生、先生方、ご来賓の皆様のご臨席のもとで、学位授与式を挙げていただきました関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

私たち修了生は、この九州大学の学府・大学院において、それぞれが、自らが究明すべき問題を見出し、向き合い、それを探求してまいりました。そのひとつの節目として、今日の日を迎えています。研鑽の過程でお世話になった、先生方、研究室の仲間たち、国内外の、志を同じくする同僚たち、事務の皆様、支えてくれた家族、友人たちに心から感謝しています。

私自身は中国の高校を卒業した後、留学生として日本にやって来ました。文化の違いを経験する中で、多様で複雑な文化がどのようにして成立しているのかという問題に興味をひかれるようになりました。自分の研究テーマを探る中で私は、比較認知科学や進化生物学の知見から、ヒト特有の豊かな文化が成立する重要な要因は、「教育 すること」にあるという議論を知りました。それならば、ヒトの「教育するちから」の本質とは何なのか、それを生み出す基盤となっているわたしたち自身の「こころ」というものが、いったいどうやってなりたっているのかと考えるようになりました。本学大学院人間環境学府に入学後の五年間は、発達心理学を専門分野として、まだ言葉を話せない赤ちゃんを対象とした実験を通して、こころやコミュニケーションの発達にアプローチしてきました。おとなとは異なる、人生の初期にある乳児の特徴を明らかにすることは、個々人と社会・文化の相互作用を解きほぐし「ヒトとはどういう存在なのか」をあきらかにする上で欠かせません。一連の研究を通して、1歳半から赤ちゃんが、まわりの大人や他者から「学ぶ」だけでなく、場面によってはおとなに自発的に「教える」可能性を提示することができました。ヒトの「教育」の起源・基盤の一端を解明することに、ささやかですが貢献できたと考えています。

論語のなかに、子曰く「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」という一節があります。これは、楽しむことこそが、何かをやり遂げる大きな原動力となるという意味です。大学院での日々は、自分の知的好奇心で新たな問題を発見することに始まり、先生や同僚との議論の中で、様々な角度からアプローチの方法を検討し、実験や調査をおこない、データを分析して、一定の結論を導き出した上で、論文と

して発信する。これらの作業の繰り返しだと思っています。周りの人たちの助けがあつてのことである一方で、基本的には自分ですべてをおこなう、孤独な作業でもあると思います。振り返れば、決して楽な道のりではありませんでしたが、研究の楽しさこそが支えとなり、今日まで歩んでこられました。

良い研究には、「運」や「タイミング」の要素もたいせつだと思います。大学院での研究生活を通じて、研究者にはその「運」を引き寄せるだけの日々の積み重ねや、粘り強い努力が必要であるとともに、タイミングを待つだけの、ある種の「余裕」や広い視野がとても大切であることを学んだように思います。

明日からもまた今日までと変わらず研究に取り組んでいきますが、今日の日を節目とし、励みとして、より一層邁進して参りたいと存じます。また、研究と社会、異なる文化を持つ社会と社会の懸け橋となれるよう努力していきたいと思っています。

もう一度改めて、素晴らしい研鑽の場を与えてくださり、今日までご指導頂いた先生方に、心より感謝します。また、日々の研究に協力してくださりご助言を頂きました共同研究者の方々、そして、これまで一生懸命支えてくださった家族に感謝申し上げます。

ご列席を頂きましたみなさまのますますのご健康とご活躍を心よりお祈りするとともに、九州大学の一層の発展を祈念しまして、答辞とさせていただきます。

平成三十年三月二十日  
九州大学大学院人間環境学府  
孟憲巍